

千羽鶴

物語：チャビ・ジラベルト

Xavi Gilabert

イラスト：ダイアナ・ガルシア

Diana García



Fundació MGC



1 origami
euro



リタとチャビは母親と一緒に、魅力的な村、モンブランの新居に到着しました。父親が病気で村の近くの病院に入院しているので引っ越したのです。一刻も早い回復を願い、毎日お見舞いに行っていました。

しばらくして、近所の子供たちが近くの洞窟に住む千年も生きている竜がいることを教えてくれました。その竜は情け容赦なく、凶暴で、面白半分に子供たちを食べるのだそうです。


MONTBLANC



暑い夏、姉と弟は木陰の涼しい場所を求めて山歩きを始めました。そして、長い年月を生きて、いろいろなものを見てきた動物が、そんなに邪悪になれるとは思えないので、龍の洞窟を探すことにしたのです。

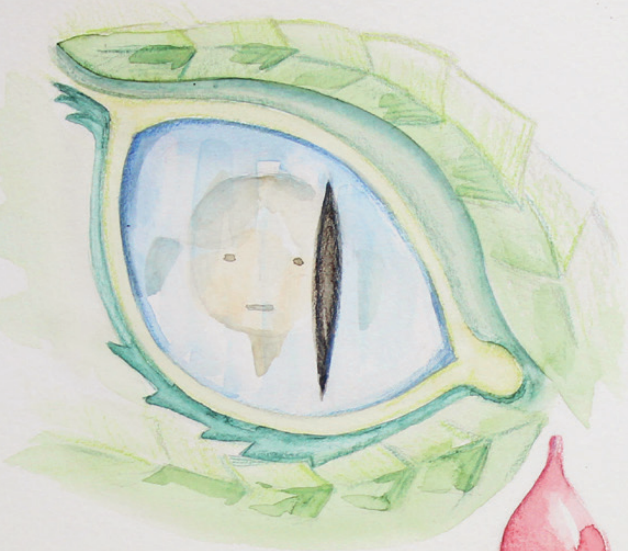
ある朝、雑草や茂みの中に、青みがかった小さな炎が足元で優雅に踊っているような、太い火のようなものを見つけました。その炎に触ろうとすると、すぐに消えてしまいました。でも、よく似た炎がもう一つ、やや小さく現れ、その後ろにもう一つ、もう一つ……とあるのが見えました。二人は小さな炎の跡をたどっていくと、下草の中に狭いトンネルのようなくぼみができました。





彼らはしゃがみ込み、その中に入り、這うようにして、小さな小川が流れる斜面にたどり着き、その上をまるでそりのように滑っていきました。右へ左へと、小さなラマたちは陽気に踊り、まるで自分たちが正しい道を進んでいることを示すかのようでした。

たどり着くと、顔を出して寝ている龍にぶつかりました。周りを見渡すと、そこは湖のようなものの中にある巨大な泡のようなものでした。その泡の表面には、今まで龍が訪れた素晴らしい場所が、水の動きで表現されていました。その中では呼吸がしやすく、龍のいびきが聞こえます。その鼻からは、この不思議な場所へと導いてくれた小さな炎が出ていました。



二人は恐れず近づき、その鼻を触りました、、、。龍に鼻があるのでしょ
うか？龍は目を覚まし、その鮮やかな
青い瞳がリタを見つめました。龍は
何も言わなくても姉と弟が父親の
病気で苦しんでいることがわかり
ました。そして、彼らの苦しみを感
じて、大きな涙を流し、それが地面
に落ちて、破裂して千枚の小さな赤
い四角い紙切れになりました。



すると突然、子どもたちはよくわか
らないまま、まるでテレパシーのよ
うに龍と交信していることに気がつ
きました。龍は、「日本には、千羽鶴
を折ると願いがかなうという言い
伝えがあるんだよ」と教えてくれま
した。

リタとチャビは顔を輝
かせながら、「千羽鶴を
作って、お父さんが元
気になりますように」と
願いました。





早速、床に落ちている赤い紙切れを拾って鶴を折ろうとしますが、どこから手をつけていいかわかりません。その時、龍が一緒になって、折り鶴の折り方を教えてくれたのです。そして、3人は千羽鶴を作り上げました。

夜も更け、そろそろ帰らないとお母さんに心配されるところだった子どもたち。それを見た龍は、子どもたちを背中に乗せると、翼を広げて上空に飛び上がりました。太い火に囲まれながら川を上り、村の上空を飛び、リタが自分の家の場所を指差すまで飛んでいきました。



龍は庭に降り立ち、子供たちは母親に合図をして一緒に上がってきました。最初は呆然としていた母親も、嫌々ながらも聞き入れて、その背中に乗って、みんなで父親のいる病院まで飛んで行きました。竜は窓際で頭を休め、3人は竜の首の上を歩いて病室に入りました。

父親は、龍の存在に驚いていましたが、思いがけない驚きの家族の訪問に大喜びしました。リタとチャビは、自分たちが作った鶴をプレゼントしました。

母親が糸でまとめることを思いつき、4列を均等に縫い、窓から吊るしました。姉と弟は、赤い鶴の短冊がそよ風に揺れる姿に目を奪われました。龍は彼らをじっと見て、龍の微笑み方で微笑んでいるように見えました。日が暮れ、姉と弟が願い事をする、しばらくして小さな笑い声が聞こえました。振り返ると、それは父親で、久しぶりに控えめに笑っていました。子供たちは共犯者のように顔を見合わせ、両親に抱きつきました。竜は長い耳に家族の笑い声が響く中、夕日を眺めながら帰途につきました。

